

地域包括ケアネットワーク No.71

認知症医療介護多職種連携研修会を行って

和気医師会理事 小谷 重光

近年、地域包括ケアの一環として、認知症の人ができる限り住み慣れた自宅で生活し続け、本人とその家族が安心できるようにケアパスの作成と普及が求められている。

今回、備前市などと共に「びぜんケアパス」を作成し、その普及のため医療介護多職種連携研修会を開催した。市民の方々も参加し、普及・啓発を図ることができたので報告させていただきます。

まず、ケアパス作成にあたり、医師、認知症でケアに携わる方、ケアマネジャー、認知症家族の会などで構成されている備前市認知症ケアパス策定委員会を4回開催。意見交換を重ねた結果、「気づきシート」、「認知症の進行と主な症状やその対策へのアドバイス」、「認知症の進行に応じて受けられる介護保険サービスや支援内容・連絡方法」、「認知症サポーター養成講座の紹介」などを盛り込んだパンフレットとなった。

研修会は、300名を超える参加があり、認知症への関心の高さが伺えた。研修会はまず、和気医師会の浦上先生よりご講演いただいた。認知症高齢者が急増しており、誰がなってもおかしくない疾患となっている。十分な理解と早期発見・治療がその後の生活を豊かにすることにつながるかと話された。

続いて、53歳でレビー小体型認知症を発症された方の講演があった。診断がついたことで不安が軽減され病気と向き合うことができたこと、ご主人から「残っている脳があるんだから残った脳を使えばいい」と励まされ前向きになれたこと、多くの仲間と出会え、生活のヒントを出し合いながら気長に支えてもらうことで今を乗り越え、喜びを感じることができるようになったことなど、多くの実体験を語られた。周囲の人の理解と支えがいかに大切であるかを述べられていたものであった。その後、「生き粋びぜん体操」という認知症予防体操を参加者で行った。

最後に、認知症ケアパスについて中心的役割を果たされた和気医師会副会長木村先生が、説明された。そして、認知症の方の目線に立ち、気持ちを理解し、他者を尊重することの重要性を説かれた。認知症の方を含め高齢者に優しい地域作りが大切であり、市民全員で関わることが重要であると語られた。そのためにも、「認知症サポーター養成講座」の受講を、と推奨された。さらに、前もって人生の仕舞い方を考え、家族など信頼できる人と話し合っておいて頂きたい（「人生会議」）と締めくくられた。

研修終了後、浦上先生、木村先生、保健師による認知症・介護何でも相談会が開催された。

多数の参加者がアンケートに答えてくださったので、その一部を紹介する。「認知症はひとつだと思っていたが、色々な種類があることを知り、驚いた。」「認知症の認識が変わり、正しい理解が必要だと思った。」「認知症は怖い病気だと思っていたが、体験者の話を聞いて心が明るくなった。」「体験者の話は、お互いが支え合う必要がよくわかり、涙が出るほど感動した。」「支え合いの大切さ、人の尊厳とは何かを考えさせられる機会となった。」「びぜんケアパスを活用したい。」「今後もこのような会に参加したい。」など、大きな反響が寄せられた。

今回の研修は、専門職だけでなく認知症ケアの主役である市民も参加したことで、広く啓発できた。また、講演者の熱い思いが参加者に伝わり、地域包括ケアの構築に向けて役立ったと考える。